

後ろめたい読書

女性向けロマンス小説をめぐる「負の連鎖」について

尾崎俊介

Shunsuke OZAKI

外国語教育講座

2002年、アメリカの大手ペーパーバック出版社から一冊の女性向けロマンスが出版された。Jude Deverauxの*The Summerhouse*である。同じ著者の前作と比較して35%も売り上げを伸ばしたこの作品は、*New York Times*紙のベストセラー・リストでもマス・マーケット部門の第2位に輝くほどの成功を得たが、出版元であるポケットブックス社では、この本の成功について、パッケージング戦略が功を奏したと述べている。¹つまり図1に示した本書の表紙を見ても分かる通り、この本の表紙には女性向けロマンス小説の表紙にありがちな「ヒロインとヒーローの抱擁シーン」が描かれておらず、一見ただけではこれがロマンス小説であるとは分からないようになっていたのである。例えば図2に挙げたような、ほぼ同時代の他のロマンス小説の典型的な表紙と比較した時、この小説のパッケージングの特殊性は明らかであろう。

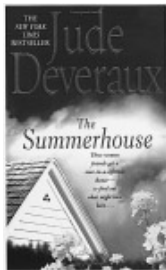


図1



図2

つまりデヴローのこの作品は、「ロマンス小説らしい」表紙ではなく、敢えて一般書のような表紙を採用したことによって売り上げを伸ばすことに成功したのである。そしてこの本の成功が一つのきっかけとなり、他のロマンス出版社も従来の「いかにもロマンス小説らしい」表紙のデザインを見直すようになった結果、近年のアメリカ・ロマンス小説市場では、むしろ表紙を見ただけではそれがロマンス小説であるかどうか判別できないような、中性的な表紙が増加しつつある。

ちなみにこうした心情、すなわち、「ロマンス小説を読んでいることを他人に知られたくない」という心情は洋の東西を問わないものであって、日本の市場においても「ハーレクイン・ロマンス」に代表される典型的なロマンス小説の愛好者には、自身がその種のロマンス小説のファンであることを隠し、書店でこれを

買う時も、「表紙の恥ずかしい本は違う本の下に入れてレジに出す」という人が多いという。²ロマンス小説の読者層の99%以上は女性であると言われるが、ロマンス小説を愛読する女性読者の多くは、自らの嗜好にどこかマイナスのイメージを抱いているのである。

それでは女性にとってロマンス小説を読む習慣はいつから始まり、それはいつから「恥ずべき行為」になったのであろうか。本稿では特にイギリスおよびアメリカに焦点を絞り、これらの地域におけるロマンス小説受容史の一側面について考察してみたい。

ロマンス小説の誕生と本を読む女性たち

一般に英語圏における「ロマンス小説」の歴史は、種々異説はあるとはいえ、一つの目安としては18世紀半ばにイギリスの印刷業者 Samuel Richardson が書いた *Pamela; or, Virtue Rewarded* (1740) に始まるとされている。この小説の主人公である侍女・パミラは、雇い主であった地主階級の老夫人の死後、その子息であるB氏に引き続き雇われ、やがて彼から執拗な性的ハラスメントを受けるようになる。だが聡明なパミラはあくまで自身の貞潔を守り続け、その甲斐あって改心したB氏から結婚を申し込まれることとなり、最終的にはめでたく妻の座を射止める。このように『パミラ』という小説は、いわゆる「玉の輿」的なストーリー展開をする書簡体小説なのだが、確かにこの作品は「小説の視点がヒロインの側に置かれていること」、および「恋愛を阻害する内的・外的要因を克服し、最終的にヒロインとヒーローが結婚、もしくは結婚の約束に至ること」、さらに「結婚の結果、ヒロインの社会的地位の上昇が予想されること」の3点において、近代ロマンス小説の根幹をなす条件がすべて満たされていると言ってよい。例えば Eliza Haywood, Delarivier Manley, Aphra Behn などの女性作家たちに代表される『パミラ』以前の「恋愛物語」(amatory fiction)の多くが基本的に「悪漢による婦女誘惑」の物語であり、最終的にヒロインの墮落・落魄を描くものであったことを考え合わせれば、あるいは、さらにそれ以前の「宮廷風恋愛」物語群の多くがヒロインより身分の低いヒーローの視点から語られる「男の恋の物語」であって、しかも幸福な結婚を前提としないものであったこ

とを考え合わせれば、『パミラ』が描くところの「玉の輿」小説の斬新さは際立っていると言えるだろう。そしてこの後、ロマンス小説の歴史を通じ、「幸福な結婚によるヒロインの身分の上昇」はこの文学ジャンルの最も重要なモチーフであり続けたことからすれば、ロマンス小説というのは、それが発生した時点からして広く女性読者にアピールする文学ジャンルであったといえることができる。

そして、女性のためのロマンス小説の形が定まった18世紀半ばのイギリスには、それを享受すべき女性読者層も確実に増えつつあった。それ以前の社会では農業であれ、商業であれ、ある意味完全な「男女共同参画社会」だったのであって、夫も妻も同じ職場で働き、本など読んでいる暇はなかった。しかし18世紀半ばから19世紀にかけて産業革命が起ると、少なくとも中産階級以上の家庭においては夫の給与所得で家族が不足なく暮らせるようになり、妻は生計を立てるための仕事から解放され、また召使を雇う経済的余裕のある家庭では家事全般からも解放されることになる。そしてこうした中産階級家庭の主婦の有閑化は、女性の識字率の向上と読書習慣の定着に大きく貢献したのである。

具体的な数字を挙げるならば、当時イギリス（イングランド）の総人口600万人のうち、男性の識字率は50%、女性の識字率はこれよりも劣るものの、30%程度には達していたという。³ これは当時、小説や雑誌などの出版物が採算を取るために十分な読者層を形成していたことを意味し、*The Female Spectator*（1744年創刊）や*The Ladies Magazine*（1749年創刊）をはじめ、女性向けの雑誌が18世紀半ばに相次いで創刊されたこともそのことを間接的に裏付けている。⁴ また18世紀末にロンドン最大の書店である「ミューズの神殿（The Temple of the Muses）」を作った書籍商 James Lackington（1746 1815）は、その回想録の中で「私の店にやって来るレディは無数にいますし、彼女たちは、（中略）、選ぶべき本、趣味のよい本や傑作について、イギリス人男性たちに少しもひげをとらずよく知っています」⁵ と記しているが、これなども18世紀末から19世紀初頭にかけて、「女性読者」の存在がもはや特別なものではなくなっていたことを傍証している。事実、1809年頃の「ミューズ」書店の様子を描いた風俗画（図3）には女性客の姿が数多く描かれており、ラッキントンの回想の正当性が窺われる。

貸本屋の登場

もっともこの時代、「本を読む女性たち」の読書欲を支えていたのは、「ミューズ」書店のような新刊書店ばかりではなかった。18世紀から19世紀にかけて、イギリスにおける本の流通の主役は、「貸本屋」(circulating library) だったのである。



図3

一般にイギリスにおける貸本屋の歴史は、1725年、詩人の Alan Ramsay（1686 1758）がエディンバラに開いた貸本屋に始まるとされているが、その後、大都市よりはむしろ温泉地・保養地などで繁栄し、18世紀末までにはロンドンに20軒、イギリス全土ではおよそ1000軒もの貸本屋があったという。⁶

イギリスでこれほど貸本屋が栄えた理由は、端的に言えば、新刊書の値段が高かったからである。例えば19世紀半ば頃、当時の小説本の通常の出版形態であった「三巻本」の値段は31シリング6ペンス（1ギニ半）ほどであったが、これは当時の中流家庭の1週間の支出の約8割にあたる。一方、当時の貸本業界最大手の「ミューディ」(Mudie's Select Library: 1842年創業)の年会費は1ギニであり、この年会費を支払えば一度に1冊、年に何回でも借り出すことができた。貸本屋を利用すれば新刊書店で三巻本の小説を購入するより安い料金で1年間自由に本が借りられたというのだから、この時代、多くの人が貸本屋を利用するようになったのも当然だろう。⁷

ちなみに、これらの貸本屋が貸し出した本のジャンルは古典、歴史書、伝記、旅行記をはじめとして多岐にわたっていたが、やはりその中心は小説、それもロマンス小説をはじめとする軽い娯楽小説であった。そしてまたその種の小説を好んで借り出したのは、圧倒的に女性であつたらしい。「らしい」と述べたのは、当時の貸本屋の会員についての記録で現存しているものが極めて少なく、その意味で当時の貸本屋の顧客に占める女性の比率を算出するような客観的なデータがないからである。⁸ ただ、貸本屋に女性が頻繁に出入りし、そこで借りた小説を楽しんでいたことについては、様々な傍証が存在する。例えば当時の風俗画・諷刺画もその一つで、図4に挙げたものは1818年頃のイギリス北東部の保養地スカーバラにあった貸本屋の内部を描いた風俗画であるが、ここに描かれた顧客の中にも相当な割合で女性の姿が散見される。また図5に示したのは James Gillray（1757 1815）による「摩訶不思議なる物語！」(Tales of Wonder!)と題された1802年の諷刺画で、貸本屋で借りてきた時のベスト



図4



図1

セラー、Matthew Lewis の *Ambrosio, or The Monk* という愛欲と汚辱に満ちたゴシック・ロマンスに夢中になっている女性たちの姿が滑稽に描かれているのだが、これなどは当時、女性たちがどのようにしてロマンス小説を楽しんでいたかを示す恰好の資料と言えるだろう。

女性読者への批判

しかしここで興味深いのは、女性たちが貸本屋を頻繁に利用し、読書に勤しむようになるにつれ、女性が小説を読むことに対する批判も生じてくるということである。

イギリスにおいて、女性が小説を読むことに対する批判は、早くも18世紀末頃には広まっていた。例えば1773年5月号の *The Monthly Review* には「女性は常に青リンゴや青グースベリーなどの健康によくない食べ物のように、小説を愛好する」とあり、⁹ 女性が好む種類の小説が有害な食べものに譬えられているが、この他、特に若い女性が小説を読むことの害を指摘する文章というのは枚挙に暇がない。例えば Clare Reeve の *The Progress of Romance* (1785) という対談形式の評論もそうした例の一つで、この中で筆者は登場人物の口を借りながら、「(貸本屋)は、今の時代の悪徳と愚行の根源」であり、「若い娘は(ロマンス小説を読むことによって)冒険と奸計を期待するよう仕向けられる。(中略)もし(地位も名誉もない)ただの人が彼女に理性的な言葉で話しかけたとしても、彼女の虚栄心は満たされず、ロマンスの中のヒーローに会いたいと思うだろう」と警告を発している。¹⁰ 先に近代ロマンス小説の端緒として言及した『パミラ』がそうであったように、「ロマンス小説」というジャンルに

はもともと「貞操を固く守る」ことを称揚するような教訓的言説が含まれていたにもかかわらず、その後巷に溢れるようになったロマンス小説の多くがあまりにも煽情的であったり、「玉の輿に乗る」という即物的な側面が強調されることが多かったため、とりわけ小説の影響を受け易い(と見なされていた)若い女性読者たちは、ヒロインの数奇な運命に憧れるあまり、現実世界に満足できなくなってしまう、ということが社会的に懸念されたのである。

また女性が本を読むことへの批判が高まるにつれ、女性が貸本屋から本を借り出すにも人の目を気にしなければならなかったらしく、例えば当時の大衆的な小説家・エッセイストであった Samuel Jackson Pratt の *Family Secrets* (1797) という作品には、「(借り出された貸本は)ある時はモスリン、白麻布、シルク、サテン、その他これに類するものの間に隠し、あるいは包みに巻き込んで、美しき密輸者によって馬車に投げ込まれる」と記されているし、¹¹ また Richard B. Sheridan の代表作、*The Rival* (1775) という芝居では、ヒロインの Lydia Languish が、恋人の父親である Sir Anthony Absolute の突然の訪問を受け、読んでいたロマンス小説を慌ただしくあちこちに隠す様子がコミカルに描かれている。18世紀を通じて小説本の判型は12折判と決まっていたが、小説本がこのような小さな判で出版されたのは、批判者の目をかいくぐるためすなわち、貸本屋から借りる時などに目立たないようにし、またそれを読んでいるところを見つかりそうになった時に、すぐに隠せるようにするためであった。¹²

貸本屋から借りた小説に読み耽る女性を見る世間の批判的眼差しは、19世紀に至っても依然として厳しく、世の中の害悪の多くは小説を読むことによって生まれ、その害を一番受けるのは女性であると言わんばかりの言説は一層の広まりを見せた。図6に示したのは、「貸本屋(The Circulating Library)」と題された1830



図6

年の諷刺画であるが、身体の全パーツが貸本屋から借りた本から出来ているのかと見紛うばかりの、まさにイタリアのマニエリスム画家 Giuseppe Arcimboldo ばりの女性像が描かれており、これを見ると当時の中流階級の女性たちがいかに沢山の本を貸本屋から借り出していたか、そしてそうした風俗がいかに批判的・揶揄的な眼差しで見られていたかが推測される。

この絵に限らず17世紀後半以降、西欧諸国における「読書画像」(=読書をしている人物を描いた画像)の中に女性を描いた画像が占める割合が次第に大きくなっていくのだが、これらの女性読書画像の多くは「小説読書による墮落への警告」という意図の下に描かれていたのである。¹³ 「ロマンス小説」を読むことは、その習慣が定着した当初から恥ずべきもの、すなわち「後ろめたい読書」であったのだ。

英米ロマンス事情比較

ところで、イギリスにおけるこのようなロマンス小説のありようは、アメリカにおけるロマンス小説の受容にどのような影響を与えてきたのだろうか。

興味深いことに、実はアメリカのロマンス小説の歴史もまた、イギリスと同様、リチャードソンの『パミラ』から始まっている。というのも『パミラ』が書かれてからわずか4年、1744年にこの小説のアメリカ版が出版され、大いに評判を呼んだからである。ちなみにそれを出版したのは当時フィラデルフィアで印刷業を営んでいた Benjamin Franklin であるが、アメリカ独立の立役者の一人であるフランクリンは、ロマンス出版史の観点から言えば、以後アメリカが「イギリス流ロマンス小説」の影響圏に入り続ける、その契機を作った人物として記憶されることになる。事実、「イギリスから、アメリカへ」というロマンス小説の流れはこの後も長く慣例となり、例えばアメリカにおけるロマンス小説の流行を決定づけ、かつ女性読者を飛躍的に増やす契機となった Susanna Rowson の *Charlotte Temple* (イギリス版1791年、アメリカ版1794年)もまた、18世紀末のイギリスで流行し、また物議も醸していたゴシック・ロマンスの牙城、Minerva Press から出版された典型的なイギリス流「誘惑小説」であった。¹⁴

ところで、未だ清教徒的な倫理観が横溢していたアメリカにおいて、「悪漢によってヒロインが誘惑され、墮落し、最終的に惨めな死を遂げる」といった内容の小説が流行する余地が残されていたのは、(上に挙げた *Charlotte Temple* の副題が“A Tale of Truth”だったことから推測されるように)、この種の「誘惑小説」の大半が、実際には完全な虚構であったにも関わらず、表向き「事実に基づく」ものであるということが出版者によって強調されたからである。つまり、純粋な若い女性が悪漢によって誘惑され、道を踏み外し、転落していった「実話」を「反面教師」として用いるとい

うレトリックの下、誘惑小説はむしろ「道徳的な読み物」として喧伝されたのだ。

そしてこれら反面教師としての誘惑小説のブームが過ぎ去った後、「ヒロインが強い信仰心を頼りに困難な状況を克服しながら、自らの幸せを掴んでいく」というような変則的なロマンス小説、いわゆる「家庭小説」が19世紀半ばのアメリカ・ロマンス市場を席捲するようになると、もはや「反面教師」云々といったきわどい口実すら必要なくなり、ヒロインの健気な行動はむしろ積極的に「見倣うべきもの」とされ、若い女性がこれを読むことは、道徳教育上好ましいと考えられるようになったことは言うまでもない。イギリスでは社会批判的となることの多かったロマンス小説なる文学ジャンルが、アメリカではさほど強い批判に晒されることがなかった背景には、「女性教育」という大義名分を逆手に取った、アメリカ独自の市場戦略があったのである。

Harlequin Romance の登場

しかし、20世紀に入ってもなお続いたアメリカにおけるロマンス小説と世論との長い蜜月時代は、1970年代に入った途端に終焉を迎えることとなる。「ロマンス小説=教育的読み物」という偽装により、長く社会的批判を逃れてきたアメリカのロマンス小説・ロマンス読者は、この時初めて試練に立たされるのである。そしてそのきっかけを作ったのは、20世紀アメリカにおける最大のロマンス小説ブームを作り上げた Harlequin Romance なるイギリス由来のロマンス叢書の登場であった。

ハーレクイン・ロマンスの出版事情、およびその発展経緯については、既に拙論で触れているので、¹⁵ここでは概略を示すに止めるが、ことは20世紀初頭にイギリスで設立された Mills & Boon (以下 M&B と略称)というロマンス専門の出版社が、試行錯誤の末、「必ず売れるロマンスの公式」を作り出したことに始まる。その公式とは、「絶世の美女とは言えないまでも性格の良さから来る魅力を湛え、貧しいとはいいいながら元気一杯自活しているヒロインが、何らかの偶然によって若き大富豪の目に止まり、この両者が喧嘩を繰り返しながら次第に理解を深め、最終的にはヒーローがヒロインの前に膝を屈する形で求婚する」というもので、このような内容のロマンス小説がどの世代の女性読者をも虜にすることを発見した M&B 社は、上記の「公式」に忠実に則ったロマンス小説を量産し、イギリスのロマンス小説市場を席捲したのである。そしてこの新たなロマンス叢書の可能性をいち早く見抜いたカナダの Harlequin 社は、1957年に M&B 社と契約を結んで同社のロマンス叢書のペーパーバック化権を取得、それを「ハーレクイン・ロマンス」としてカナダで販売し始めただけでなく、1963年からはこれを

アメリカでも販売することとなって、これが1970年代から1980年代にかけてのアメリカにおけるロマンス小説の一大ブームを引き起こすことになったのである。何しろ1980年代のアメリカでは、「フォーミュラ・ロマンス」(＝形式の定まったロマンス小説)が全ペーパーバック市場の4割を占めるほどの人気を誇ったというのだから、ハーレクイン・ロマンスがアメリカの読書界にもたらしたインパクトの大きさも想像できるだろう。

ロマンス批判の再燃

しかし、先に述べたように、このようなロマンス小説の大ブームは、同時にアメリカの世論を刺激し、ロマンス小説に対する激しい批判を引き起こす結果となった。というのも、ハーレクイン・ロマンスがアメリカに上陸した1960年代初頭、アメリカでは「第二次フェミニズム運動」が沸き起こりつつあり、時を同じくして盛んになってきたフェミニズムの観点から見れば、「結婚こそ女性の幸福の源」であるかのように見なし、「男性(＝ヒーロー)に経済的、精神的に依存する」ことを奨励するかのときフォーミュラ・ロマンスは、「女性の最悪の敵」¹⁶に見えたからである。

かくして1970年、Germaine Greerがこの種のロマンスを「女性を奴隷化するもの(“an enslaver of women”)」と批判したのを皮切りに、¹⁷ フェミニズム陣営からのこの種のロマンス批判は急速に蔓延し始めるのだが、とりわけ舌鋒鋭かったのはAnn Douglasであった。¹⁸ 彼女は1980年、*The New Republic*誌に掲載された“Soft Porn Culture”なる刺激的なタイトルの論文をもってロマンス小説の流行に切り掛かったが、この評論の中でダグラスは、フォーミュラ・ロマンスのヒーローの、ヒロインに対するサディスティックな言動や剥き出しのセクシュアリティが、何ら批判を受けないばかりか、むしろ肯定的に捉えられ、しかもそのようなヒーローに従順に従うことがヒロインにとってこの上なくエキサイティングであるかのように描かれていることを強く批判し、このようなストーリー展開を飽きもせず繰り返すロマンス小説を「女性のために水増しされたポルノ」と決めつけた。18世紀・19世紀のイギリスで保守派によって批判されたロマンス小説は、20世紀後半のアメリカにおいて、逆に革新派によって批判されることになったのである。

ロマンス小説を読むことの「後ろめたさ」

そしてフェミニズム陣営を中心としたロマンス小説批判の盛り上がりは、ロマンス小説の愛読者である女性読者に影響を与えずにはおかなかった。彼女たちは、自分たちの読書行為が世間からどのように見られているのかを理解し、「後ろめたさ」を感じ始めたのだ。

1979年から1980年にかけて、すなわち上記ダグラスが

フォーミュラ・ロマンスを「女性向けポルノ」と弾劾したちょうどその頃、アメリカでロマンス小説愛好家の女性50人(全員が女性、75%が既婚者、その大半が就学年齢に達した子供を持つ)を対象に詳細な聞き取り調査を行ったJanice A. Radwayによれば、彼女の被験者たるロマンス小説愛好家たちは、主として3つの点でロマンスを読むことに「後ろめたさ」を感じていたという。すなわち、「自分たちが読んでいるロマンス小説に対する世間的評価が低いこと」、「ロマンス小説購入のため多額のお金を使うこと」、および「ロマンス小説を読む間、家族の面倒が見られないこと」の3点である。¹⁹

しかし、一つ意外に思えるのは、これら3つの「後ろめたさ」の要因の中で、最も大きな要因は3番目、つまり「家族の面倒が見られないこと」であったということである。その大半が主婦であると言われているロマンス小説愛好家にとって、家族(夫と子供)に対して申し訳ないということが、最大の「後ろめたさ」であったのだ。

では、そういう後ろめたさがあるにも係わらず、なぜ彼女たちはロマンスを読むのか。先の調査を行ったラドウェイは、当然この点についても聞き取りを行っているのだが、その間に対し、被験者たちが異口同音に答えているのは、「ロマンスを読む時間だけが自分の時間だから」ということである。ロマンス小説の愛好家の女性たちは、夫や子供の面倒を見る責任と重圧からしばしの時間でも逃れ、自分だけのために時間を費やす方策として、ロマンス小説が提供する空想世界に遊ぶことを選んでいたのである。

ロマンス読書をめぐる「負の連鎖」

日常生活の重圧からの逃避としてロマンス小説を読む。実はこのことはアメリカのロマンス小説愛好家にだけ当てはまることではない。ラドウェイの調査と同じような調査を1960年代末にイギリスで行ったPeter H. Mannの報告によると、彼の被験者たちの多くもまたロマンス小説を読む動機として、「主婦として、夫や子の世話をしなければならぬ、家庭をきりもりしなければならぬ、食事をつくらなければならぬ、ことによると家庭の外で仕事もしなければならぬ、だから実生活の圧迫から何らかの逃避をする必要がある」と明確に主張した、というのだ。²⁰ つまりイギリスにおいても、またアメリカにおいても、現代のロマンス小説の愛好家たちがロマンス小説を読む、その最大の動機は「日常生活からの逃避」なのである。

しかし、先にも述べた通り、日常から逃避すること、家族の面倒を見ることから逃避することこそ、ロマンス読書がもたらす「後ろめたさ」の最大の要因でもあるのだから、ことは複雑である。つまり、現実を逃避してロマンス小説の世界に浸ることが「後ろめたさ」

の感情を生み、その感情がまた新たな重圧となつてのしかかってきて、そのためさらにロマンス小説の世界に逃避せざるを得ないという悪循環がここには生じているのだ。これを「ロマンス読書をめぐる負の連鎖」と名付けるならば、この「負の連鎖」に巻き込まれた形で「後ろめたい読書」こそが、現代ロマンス小説の受容のあり方なのである。そしてこのあり方こそが、本論の冒頭に掲げた問いへの回答でもあるのだ。ロマンス小説を愛読する現代の女性読者たちが、一見したところ「それらしく見えない」表紙を纏ったロマンス小説に手を伸ばしてしまうのは、「逃避としての読書」の象徴であるロマンス小説を買っているところを他人に見られたくない（あるいは、自ら意識したくない）という、微妙な心理の顕れだったのである。

結語：ロマンス小説研究の行方

かつてロマンス小説が産声を上げた時、それは産業革命を背景にした中産階級の勃興に伴う女性の労働からの解放の象徴であり、女性の識字率の上昇のパロメータであり、女性読者の存在を文学史に刻む契機でもあった。またロマンス小説における「ヒロインの地位・身分の上昇」というモチーフは、現実の女性の地位・身分の上昇への憧れであり、予言ですらあった。そして今、ロマンス小説の幸福感に満ち溢れた空想世界は、日常生活の重圧に苦しむ現代女性の駆け込み寺となっている。ロマンス小説のあり方は、常にその時代の女性の「立ち位置」に連動して動くのである。

そしてロマンス小説がそういうものであるとするならば、この文学ジャンルを研究する場合、その内容の希薄さを批判するだけでは不十分であることは明らかであろう。現代文化の一側面と位置づけた上での、あるいは女性学の視点も採り入れた上でのロマンス小説研究がなされない限り、ロマンス小説という文学ジャンルそのものの存在意義が、研究者の手をすり抜けて「逃避」してしまうことは避けられないのである。

注

- 1 山内美穂子「ロマンス出版事情」『出版ニュース』通巻1943号, 2002. 7. 21. p. 19.
- 2 岡本なるみ『AERA』1999年5月24日号, p. 69
- 3 大久保桂子「日曜日は『読書』の日」『「非労働時間」の生活史』(川北稔編)リポート所収, 1987. p. 73.
- 4 高宮利行・原田範行『図説本と人の歴史事典』柏書房, 1997. p. 238.
- 5 A・S・コリンズ(青木健・榎本洋訳)『文筆業の文化史：イギリス・ロマン派と出版』彩流社, 1999. p. 74.
- 6 清水一嘉『イギリス小説出版史：近代出版の展開』日本エディタースクール出版部, 1994. p. 25.
- 7 同上, p. 26およびp. 59.
- 8 清水一嘉「大衆読者の成立：貸本屋の社会史(七)」『愛知

大学文学論叢』第98号, 1991. 10. pp. 60-63. 清水によると、数少ない現存資料としてパース市立図書館で発見されたジェイムズ・マーシャルという貸本屋の会員名簿にみられる女性顧客の比率はおおよそ30%程度だという。

- 9 同上, p. 56.
- 10 清水一嘉「大衆読者の成立：貸本屋の社会史(六)」『愛知大学文学論叢』第97号, 1991. 7. p. 38. およびQ. D. Leavis, *Fiction and the Reading Public*. London: Chatto & Windus, 1968, p. 133. を参照せよ。
- 11 清水一嘉「大衆読者の成立：貸本屋の社会史(六)」. p. 44.
- 12 清水一嘉『イギリス小説出版史：近代出版の展開』. pp. 31-35.
- 13 安形麻理・石川透・上田修一・田村俊作・瀬戸口誠『読書史の中の読書画像』(於第54回日本図書館情報学会全国大会資料PDF書類), 2006. 10. 21. p. 3.
- 14 「アメリカ家庭小説」のありようについては、進藤鈴子『アメリカ大衆小説の誕生：1850年代の女性作家たち』, 彩流社, 2001. に拠った。
- 15 尾崎俊介「恋の道化師伝説：ハーレクイン・ロマンスの誕生とその影響について」『文化のカレードスコープ』(久田晴則編)所収 英宝社, 2003. を参照せよ。またハーレクイン・ロマンスの成立事情の詳細については Paul Grescoe, *Merchants of Venus: Inside Harlequin and the Empire of Romance*. Vancouver: Raincoast Books, 1996. が参考になる。
- 16 “Their Own Worst Enemies”とは、M&B社のロマンスを論じた Daphne Watson の著書のタイトルでもある。
- 17 Pamela Regis, *A Natural History of the Romance Novel*. U of Pennsylvania P, 2003, pp. 3-4.
- 18 Ann Douglas. “Soft Porn Culture: Punishing the Liberated Woman.” In *The New Republic*. Vol. 183, No. 9 (August 30, 1980), pp. 25-29.
- 19 Janice A. Radway, *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. Chapel Hill and London: The U of North Carolina P, 1991. の調査結果に拠った。
- 20 ピーター・H・マン(河本伸聖・栗原裕訳)『本の本：イギリス出版事情』研究社出版, 1987. p. 222.

図版出典

- 図1 Jude Deveraux, *The Summerhouse* (Pocket Books) 表紙
- 図2 Ann Mather, *The Millionaire's Virgin* (Mills & Boon) 表紙
- 図3 “The first floor interior of Temple of the Muses” 1809年(<http://hibiscus-sinensis.com/regency/stores.htm>)
- 図4 “The Circulating Library in Scarborough” 1818年頃 (<http://hibiscus-sinensis.com/regency/stores.htm>)
- 図5 James Gillray, “Tales of Wonder!” 1802年。(http://www.york.ac.uk/inst/cecs/tales_of_wonder.htm)
- 図6 “The Circulating Library” 1830年.(Science & Society Picture Library No. 10422283)

(平成19年9月18日受理)